

随想 日本型の特異性

グローバル化社会で生き残るには

(株)P P Q C 研究所 加藤 宏光

日本型うんぬんという表現は結構昔からいわれている。

石田梅岩の《縮み志向の文化・経済》あるいは《協調型》等がその例である。

資源の有限性が憂慮されるようになって、いまあるものを有効に…という傾向が強まり、江戸時代の社会哲学（経済を含める生きざま）が再評価されるようになってきている。

《戦国の切り取り次第に領地を増やすことができる》という観念が、豊臣秀吉による深刻な朝鮮出兵失敗を踏まえて、徳川家康が開いた幕府は領地拡張の限界を前提に国内の新田開発等の奨励はするものの、国外への拡張を停止したことはよく知られている。

拡張をしない経済であったため、江戸時代を通して《モノを大事にする心》は現代の消費に比較すればけた違いであり、紙や布を例にとつても使える限り使っていた。

木下恵介による映画《楳山節考》一九五八年・松竹映画のワンカットに《山奥の寒村に住む若妻に別れの餞別として、姑が大事にしていた古布を与える。この若妻は里帰りしている最中に、部落ごとヒト減らしのため殺戮される。貴重な古布は、末期の餞別として姑から若妻に渡される（という設定で、場面の悲惨さを克明に表現していた）》シーンがあった。映画のシーンとしても、この時代をよく反映したモノとして心に残っている。

いる。

振り返れば、著者の幼かったころは敗戦の影響が色濃く、モノを大事にすることは当たり前であった。ご飯ひと粒を無駄にすると祖母に『お米を粗末にすると目がつぶれるよ！』と叱られたものであった。小中学校のトイレの生産物をどこかからの農家さんが仕入れ、幾ばくかのお金になっている、と当時の担任教師に教えられたこともある。

また、協調型の決定には《ポトムアップ》の良さもある。一方で、日本型の協調を前提とする決定には時間がかかり、責任の所在があいまいである、という批判がある。

十月二十七日の東京新聞（夕刊）の一面のコラムに、これに

関する記述があった（ハロルド・メイ新日本プロレス社長）。その要旨は次のようにまとめられる。

彼の経営経験（外資系三社、日本の会社三社）によれば《外資系ではトップダウンの命令で業務が施行され、その責任所在が明瞭である。マネジャーの決定権は強く、即座に決裁しないこと事態が即無能との評価に繋がる》。一方日本企業では《根回しが必須であり、決裁と実行に時間が掛かる。一方で、決定者が明確でなく、責任所在が不明である。また日本型では、無能であることが、失職の原因とはならない》とその違いを対比している。

日本の会社では、営業者が新

規製品等の販売活動に顧客会社を訪問しても、価格提案を受けて即時決定することができない。条件を持ち帰り、上司への根回しにより決定することとなる。

グローバル化しつつある経済界で、時間をかけるこのようなスタイルは今後の生き残りが難しくなる、と結んでいる。

著者の生きる《採卵養鶏会社》では、もっぱら社長のトップダウンで業務のすべてが施行される。この傾向は、中小企業では当たり前ともいえる。中小企業では、発生するすべてのリスクが無限責任として経営者に掛かってくるのであるから、経営者のトップダウンはある意味当然ともいえよう。その分、中小企業では（当然、養鶏会社を含む）日本型大企業に比較して、方向性の決定が早いのは当然であろう。

同日同紙（朝刊）の二面に《人間の臓器を持つ動物解禁》という囲み記事がある。

先の記事とは関連はないが、《新聞にいかに多種多様な情報

が集められているか》を実感した。

遺伝子操作技術の進化はすさまじいものがある。さかのぼれば二〇年近くも前のこと《人間に、ブタの肝臓を移植することにより肝臓不全を治療する》技術の可能性が紹介されたことがある。これを取り上げて、著者はスタッフに次のジョークを話した。

『ヒトの体に移植した肝臓を取り出して食べたとしたら、それはヒトを食べたことになるの？ブタを食べたことになるの？』

《二十六日、政府の生命倫理専門調査会は、人の臓器を持つ動物の研究を認める決定をした、という。ヒトのIPS細胞遺伝子をブタ等の卵子に注入し、それを動物の子宮に移植する実験を許可する方向で検討するといふ。海外では人の臓器を動物を使って再生させることを目的とした実験が行われている。今回の方向性は、これに対応したもので、国際的な動向を視野にいられている。ヒトと動物の細胞が

混在する動物は倫理上問題が大きいとされてきたが、ヒトの子宮には移植しない、等の基準を明確にすることを前提として、実験を可能とするものである、という。

このような動物を《キメラ（Chimera）》と呼ぶ。キメラは本来ギリシャ神話にある、ライオンの頭、ヒツジの胴体、ヘビの尻尾を持ち、火を吹くというギリシャ神話に出てくる怪物で、日本の鶴のような架空の動物であり、正体の知れない生き物とされる。

本来なら異物反応（免疫作用）により直ちに排除される他の動物の組織を《科学の力》によって埋め込み、成長させることができるということ事態が驚きであると共に、空恐ろしい気がする。

経済を含む社会活動で《日本型》であれば、グローバル化社会で遅れをとる可能性が高く、近い将来医療に応用されるであろう遺伝子技術でも《日本型》であれば同じくグローバル化時代に取り残される可能性が高

い、ということになる。既定のイメージからほど遠いさまざまな事象で、急がねば世界の基準に追いつけない、とせかされる。

気忙しく不安の募る時代と感

じるのも、時代に遅れ始めているからであろうか？

注：石田梅岩…（一六八五～一七四四）京都府亀岡市で百姓の次男に生まれた思想家、哲學家。確立した思想としては《石心門学》と称される。一七二七年に小栗了雲に師事して、思想家としての道を歩み始めた。後に、無料で誰でも受教できる講座を自宅に開いた。梅岩は、それまで軽視される傾向のあった商業に対して《商業は交換の仲介であり、その意義は他のいずれに劣るものではない》という明確な社会的な位置付けをなした。このため、社会的な位置付けが低かった商人に大きな共感を得た。近年企業の社会的責任がクローズアップされるに従って、改めて評価されることが多い。